

岩波新書

鈴木孝夫著 「ことばと文化」

英語科 大 滝 真

近年、世界的な国際化の進展に伴い、日本人が海外へ出掛け、自分の生まれ育った文化と異なる文化を持つ外国の人達と接触する機会が急激に増している。言語が異なるばかりでなく、風俗・習慣の違いが生活のあらゆる面に認められる異文化に接し、その文化を正しく理解することは至難のわざである。異なる文化に接した時に受ける、いわゆるカルチュア・ショックは単一民族・島国という条件に規制される日本人の場合には、特に強烈であろう。しかしながら、異なる文化を理解することは、自国の文化に対してより正しい認識を持つことにもなるのである。

最近、日本人及び日本文化に対する関心がとみに高まり、日本人の意識構造、社会構造、あるいは精神構造を取り扱った日本文化論、日本人論に関する書物が相次いで出版される一方、言語の問題に対する関心も今迄にない高まりを見せている。このような時に、はからずも、「ことばと文化」という本が出たことは、いかにもタイムリーな著作というべきで、ことばを扱った文化論としては、これまでに出版された数ある文化論の中でも異色のものであろう。著者は慶応義塾大学言語文化研究所教授で、今までも言語学関係の論文を数多く発表している。この本は、ことばそのものに鋭いメスを入れ、ある種の言語活動が他の文化とどう対応しているかを追求した力作である。日本語と日本文化とのかかわり合い、著者の言葉をかりれば、〈ことばというものが、いかに文化であり、また文化としてのことばが、ことば以外の文化といかに関係しているか〉を出来るだけ平易なことばで明らかにしたものであり、この本の中で使われている文化とは〈人間の行動を支配する諸原理の中から本能的で生得的なものを除いた残りの、伝承性の強い社会的強制（慣習）の部分をさす概念〉を意味し、従って言語活動の大部分

にも、この定義が当てはまる。

著者はまず、文化の違いを取りあげる。国が違えば文化（言語・風俗・習慣・行動等）も異なるが、その文化の相違とは、普通誰もが気付く、比較的目につきやすい具体的な現象——例えば、日本では箸を使うが欧米ではスプーン、ナイフ、フォークを使うといったようなこと——に限られ、一方このような顕在的な文化（あらわな文化）に対して、仲々気がつかない目に見えにくい文化の側面（かくれた文化）があるという。例えば、日本人と西洋人がスプーンを使ってスープを飲む時の、両者のスプーンの使い方の微妙な相違——スプーンと顔との角度、姿勢、口の中への入れ方等々、細かく観察しなければ容易に気づかない相違である。習慣とか行動面についてだけでなく、ことばについても同じことが言える。このような本人が自覚していない、かくれた文化の側面に目を向けることが異文化理解の鍵となり、外国語学習の一つの重要な意義となる、と著者は言う。

次に、ことばの卑近な例として、英語のbreakとdrinkという二つの動詞を挙げ、breakが「割る」「折る」という意味を持ちながら、「スイカを割る」とか「折り紙を折る」という場合には使用出来ないこと。またdrinkは「のむ」という意味であっても、「タバコ」「薬」「毒物」には使えない理由を述べ、日本人がしばしば犯す英単語使用上の誤り、及び困難の原因は、実は〈ことばの意味や使い方には構造があって、それが言語によって異なっているという認識〉が教師の側にも欠け、ことばの持つ構造性と無関係に、外国語教育あるいは辞典の編集が行なわれて来た事実を指摘する。この指摘は正しいと思う。

文化の中にある項目（例えば事物や行動）は、他のいろいろな項目の中で相対的に価値や意味が決まる。

従って、ことばも文化も構造的に捉えるべきであるが、注意すべきことは、外国の文化を理解する場合は自国語の構造を対象に投影して理解すると（即ち自分の文化の構造に基づいて対象を一般化する）、しばしば食い違いが生ずることになる。有名な英語の諺、It never rains but it pours. の意味が日本で出ている英和辞典とオックスフォード系のそれとで食い違いが見られる事実を述べているが、この例などいかにも日本的な意味の捉え方がうかがわれ、興味深い。これに類した誤りの例は意外と多いかも知れない。

ところで、我々が周囲の世界を認識する時の手が必要になるものは、ことばであり、ことばがなければ物と物の区別が出来なくなると言ってもよい。言語は何を見るか、何を感じるか、いかに考えるかなどについて、影響を及ぼす。言語が思考を規制すると言ってもよいと思うが、言語が異なれば外的世界の截り方、認識の仕方が当然違って来る。例えば日本語的世界観と英語的世界観とナヴァホの世界観の間には差異が生ずるわけである。クラックホーン流に言えば、地球上には〈言語の数と同数の哲学〉があることになる。語彙を分析すると、その文化の重点がどこにあるかがわかり、又そこには歴史が反映されている。著者は日本語でH₂Oが「水」「湯」「氷」の3通りで区別されるのに対し、他の外国語の場合はどうなるか、とか英語のlipと日本語の「くちびる」との意味のずれ、又「鼻」「顎」に対する日本人と西洋人との描写の違い、その差異を生じさせる〈かくれた文化〉の強制力などを、多くの実例で解説するが、日本人には仲々気付きにくい点だ。

次に意味と定義を扱っている。言語学においては、これまで音声面の研究に重点が置かれて来たため、意味の面の研究はひどく遅れている。意味と定義をいかに識別し、辞書的レベルにおいて意味の厳密性と有効性を高めるためにどう工夫すべきか、その考え方と実例を示している。示唆的な提言である。

日本と西洋における動物観の違いを述べた興味深い一章があるが、家畜についての日本人とイギリス人の概念の違いを知る上で参考になる点も多いと思う。犬とか馬とかに対して、イギリス人も自分達とほとんど同じような考え方をしているようでいて、実はその文化の相違から、感情的領域においては家畜の価値づけが全然違っている事実を知り、改めて〈かくれた文化〉に思いをいたすことであろう。試みにP.O.D.でdogを引いてみたまえ。“companionship”という語が暗示する文化的意味の深さに驚く筈だ。それからもう一つ参考までに。(或る本で読んだことだが) 犬鍋は中国の広東の名物で広東人の大好物であるという。つまり広東人の文化は犬を食べる文化なのだ。これとイギリス人・日本人の場合とを比較検討してみるのもよかろう。

さて、以上述べた考え方の一つの実践例として、「人を表わすことば」の問題が徹底的に究明される。ここ

が本書の白眉とも言うべき部分で、最も独創的な研究であり、著者の面目躍如たるところがある。日本語では自分を何と称し、又、相手を何と称するかという問題、つまり一人称、二人称代名詞の用法を、インド、ヨーロッパ諸語との対比において分析しているが、人称代名詞という枠よりもっと広い意味に適用させるため、自称詞、対称詞（第三者は他称詞）と呼ぶことを提唱し、ヨーロッパと日本語の人称代名詞の歴史的背景、日本語の自称詞と対称詞の構造、親族名称の特異な用法を明らかにし、それらの中に認められる日本人の自称詞や対称詞の特異な構造が、日本人に固有の行動様式や考え方と、どう結び付くか、これに対する著者の言語社会的解釈と分析が行なわれている。日本人が相手の役割を重視し、これを固定化し、言うならば、〈対象依存型の自己規定〉を言語的に行なっている事実を指摘し、日本語の構造の中にそれを裏付ける要素があることを実証してみせる。日本的特性として、対象に同化する心的構造が挙げられるが、このような日本人特有の精神構造を可能にする要因については、ほとんど論及がなされていないが、ヴェネディクトがいみじくも指摘した「名」と「恥」の文化であればこそ、義理を重んじ、相手の気持を先取りし、中根氏の言う「直接々触的人間関係」が結ばれ、更に「甘え」を助長する風土でもあるのだ。同氏の、いわゆる「日本的連続の思考」がまさしく日本語の中に息づいている。

最後に一つだけ付け加えると、ヨーロッパ語の中には、二人称の使用について、本書で見る程簡単な問題とは言えない言語もあり、特に二、三の言語においては、しばしば大論争の種になった事例が残っている。

ことばのしくみ、文化との深いかわり合い、〈かくれた文化〉の存在等々。この本を読むことによって読者はことばの面白さを一層知るであろう。

『科学技術と権威』

5M 馬場康友

ソ連の誇る超音速旅客機TU144が、6月3日午後、バリの航空ショーで空中爆発後墜落した。これを新聞で知ってまたかと思うと同時に一冊の本が思い出された。「マッハの恐怖」柳田邦夫著である。内容は昭和41年に続発した大型ジェット旅客機の墜落事故に関する一連の調査分析について初心者にもわかり易く説明した本である。

著者は東大経済学部卒業後、NHK社会部遊軍記者として活躍しているが、この取材のために5年近くの間、論理的な見通しや根強い問題意識を持って、取組み、一冊の本にまとめたのである。

事故というものは、多くの場合極めて特異な条件下

において個々の症例として発生するものである。しかし、墜落事故はその発生条件が極めて特異であるが故に、日頃看過しがちな現代の科学技術の危険な陥穽をさらけ出すことになる。現代の繁栄を支える科学技術が、主人公である人間をのみこんでしまう危険な陥穽を内包していることについては、最近公害告発の過程でもようやく暴露されてきたが、ジェット機事故の場合はこの危険な陥穽が乗客の大量即死という形態を取るためにより鮮烈である。にもかかわらずジェット機事故が現代の科学技術批判という高い次元で論じられることは少なく、単なる事件として処理され終結してしまうのが過去の例であった。著者は、金属や論理や数字などの無機質なものと現代の人間のかかわりについて挑んでみたのであるが、このような無機質なものはとつきにくいこともあって従来ノンフィクションの世界でも避けられてきた。だが我々がもたれかかっている物質文明が時としてのぞかせるどす黒い亀裂に照明をあてるためには、このような無機質なものの問いは、もはや避けて通れないものと考えている。同時に著者は、このような事故調査の場合における技術者とその権威の真のあり方をも示唆するのである。

航空機事故の原因調査はたえず多くの困難をともなう。系統、装置類が複雑な上に、多くの場合生存者がいないためだ。ジェット機時代に入ってこの困難の度合いはますます深くなった。予想もしなかった要因がしばしば致命的な原因になった。その最初はイギリスの世界最初のジェット機コメットの連続4件墜落事故であった。1950年代、コメットは当時イギリスがソビエトより4年、アメリカより6年もはやく民間航空路に就航させた世界に誇る旅客機であった。それだけにイギリスの受けたショックは大きく、国力をあげて原因究明にとり組み半年後に解明した。回収された残骸を調べていた調査員が機体の最前部の操縦席の窓ワックに金属疲労によるものとみられる亀裂の跡を発見した。調査団はこれを実物大の実験で確かめ、次の様な結論に達した。コメットは、それまでフロベラ機が飛ばなかった高度1万メートル以上の高層を飛行しているため、機内は呼吸可能な空気に圧搾しなければならず、機体には設計者が考えていたよりも2倍もの引張り応力が働いていた。ひずみが集中したのは最前部操縦席の窓であった。時速900キロの高速で飛ぶ機体の表面は空気との摩擦によって生じる猛烈な熱応力を受けたのであった。飛行を重ねるうちにひびは裂け目になり、機体は爆発的に分解した。コメットの悲劇は各国のジェット機の開発に貴重な教訓となった。

新しい飛行機は、性能をあげた分野、あるいは未知の分野で事故を起こすということが、その後の事故調査のテーマとなった。それでは昭和41年春の日本の空の異常の原因は何であったのだろうか。

2月4日、全日空ボーイング727型機羽田沖に墜

落。133人全員死亡。

3月4日 カナダ太平洋航空ダグラスDC8型機羽田空航で着陸に失敗して炎上、64人死亡、8人重軽傷。

3月5日 イギリス海外航空(BOAC)ボーイング707型機富士山麓に墜落。124人全員死亡。

ダグラス機とBOAの機については事故調査の点からは興味深い、私のいいたいこととあまり関係ないので727型機のみ限定する。実際727型機の方は5年以上調査しても結論はわからずじまいだったのに対し、カナダ機の場合は濃霧という最悪の気象条件、BOAC機の場合は、乱気流の発生する飛んでならないところを飛んだということから航空機事故調査史上数少ない明確さをもって、事故の全貌を明らかにした。

さて問題の727型機であるが、特長として次の6点があげられる。

1. 最も新しい3発リアエンジン形式を採用していること。(1)エンジンが機体の中心線近くに集められているため、低速時でも、安定性が優れ、エンジンが一発停止しても、左右のアンバランスが極めて少なく、操縦性が容易で安定性が高い。(2)エンジンを翼から外し後方に移した結果、翼の効率をよくしている。(3)二発での離陸は勿論、一発でも水平飛行は可能である。
2. 短い滑走路で離着陸できる。
3. 最高巡航速度はマッハ0.9でほぼ音速。
4. 上昇、降下性が非常に優れている。
5. 着陸速度が従来のジェット機と比べて著しく遅く、安全性が高い。
6. 操縦系統は、それぞれ独立した油圧と電気による二重のシステムで、さらに手動による第三の方法まで完備されている。(つまり通常は油圧で作動するが、油圧系統が故障すれば電気で作動し、それもダメなら手で動かせるという三重の安全性をとっている)

ボーイング727は、たちまち世界各国の航空会社から注文が殺到し、あっという間にベストセラーになった。最もすぐれた性能を持ち、三重の安全性をもつ最新鋭ジェット機がおだやかな気象条件でなぜ墜落しなければならないか。パイロットのミスなのか。機体や整備に異常があったのか。

木村秀政日大教授を団長とする事故調査団は調査方針を4点に絞った。①墜落までの経過を詳細に調べる②アメリカで起きた同型機の三件の事故調査の様子を調べる③日本航空と全日航から727型の使用経験を聞く④機体をできるだけもとの形に整理する。また団長は記者会見で「機体構造や操縦系統に万一問題があることがわかったら、727型機を使っている国に大きな影響を与えることになるので調査は慎重に進めたい」と述べている。航空工学の権威として知名度の高い木村団長は、東大航空工学科卒、戦後初の国産旅客機「YS11」の技術委員長を勤め、肩書きには、科学技術庁航空技術審議会々長、通産省航空審議会委員。

運輸省航空審議会委員などがあり、航空界では事ある度にその名前が登場した。木村団長は、ボーイング727の国内線への導入の際には積極的なすいせん役を果たし、羽田沖の事故後も727の一般的性能に関しては「きわめて優れた飛行機」と言い切っている。

調査団は機体欠陥説とパイロットミス説に分かれてしまい、延々と5年もの間、実験と論争が繰返されるわけである。梶林氏（航空局事故調査員）山名氏（東大航空工学部教授）らは、東京湾で尾部の海底調査を現場で指揮していた時、機体の回収が進むにつれて、左側第三エンジンがなくなっていることに気付いた。そしていくつかの奇妙な事実気付いた。

①エンジンの推力を示す計器の針を見ると、第一、第二両エンジンの針は同じところを指しているが第三エンジンの針だけは、かなり低い目盛りのところを指していた。②エンジン火炎の時燃料供給を停止し、消火剤を放出させる「エンジン消火レバー」を調べると第三エンジンのものだけが、引かれなかった形跡を残しており、頭部の取っ手がこげていた。③第三エンジンを始動させる「スタート・レバー」だけが「停止」の位置に切りかけてあった。④第三エンジンは上下2ヶ所と後方1ヶ所の計3ヶ所で、金属ボルトによって胴体に取り付けられているが、エンジンが脱落している胴体部を調べてみると、とくに前方上側のボルト取付部付近に、切れたボルトによって何度もたたかれた跡がある。つまり、第三エンジンは脱落するまでに、まず前方上側ボルトが切れて何度もガタガタゆれた形跡がある。（わずかに1センチあまりのボルト3本で2トンもあるエンジンを支えているわけだが、ボーイング社の説明によると「エンジン爆発などの異常事態のときはむしろエンジンが脱落した方が機体の安全によいのでボルトはわざわざ細く設計した」とある。ボルトはいわば「ヒューズ」の役割も果たすわけである。）

第三エンジン関係を検分した後の記者会見で木村団長は次のように語った。「どこがこわれているなどと聞かないで欲しい。原因がわからないうちは航空局員にも一切しゃべるなどと言ってある。ボルトとか何がこわれているなどと言ったら、727型機を使っている日本航空だって困る」なぜ727型機を使っている航空会社が困ることを強調するのか。利用する国民のことをどう思っているのか、という疑問が記者団の間に残った。

団長らは残がいの中に原因を見出すことは困難とし、飛行機は一応「シロ」とみて、727型機の降下時の操縦技術に焦点を合わせて事故を理解しようとしていた。727が降下性が優れているため、10秒間でもよそ見をしていたり計器を見誤ったりすると、すぐ海面にたたきつけられる危険が多いということを理由にして、記者会見では、①千葉上空1万フィートから現場まで降りることは、決して無理なことではなく、72

7型機の性能の範囲内であること。②それにもかかわらず事故を起こした理由を、人間的な要素という面から調べてみる必要がある。③人間的な要素とは、たとえば夜暗くなるときの高度の錯覚、操作の忙しい降下時に他機に気を取られた場合の操縦の問題、など心理的な問題が中心である。

木村団長発言後、各新聞は一斉に「操縦ミス説強まる」と、筆をそろえて書き立てた。

第三エンジンは胴体発見の数日後、着水コースより右方70mものところで発見された。団長側が「シロ」とみた機体を徹底的に調査していた山名教授は、2トンものエンジンが胴体より70mも吹っ飛ぶためにはどのような状態で水中に突入せねばならないかを模型を使って実験をした。そして、エンジン関係は東大工学部熊谷教授ら、エンジンと燃焼の専門家に依頼して、この実験を行なった。次々と海底から引き上げられた残がいからは不審な点が相当残った。非常脱出口が開の位置にあって後方ドアが「開」であったり、救命胴衣が30%ほど手をつけてあったり、遺体の30%近くは安全ベルトの跡がない、また火傷を負っている者もあった。

山名教授はさらにグランドスポイラー及びフライトスポイラーの残がいを目を付け、徹底的に調査した。グランドスポイラー、フライトスポイラーとは、減速機の一つで前者は着陸してからのブレーキの役目を果たし、後者は飛行中における減速に使う。しかし727のスポイラーは以前、軽量化のために高分子材料を機構の一部に採用していたところ、異常な降下現象が発生し、調べてみたら、フライトスポイラーを作動させようとするグランドスポイラーも立ってしまう大欠陥が生じ、それは高分子材料の劣化が原因であってボーイング社は世界の航空会社にあわてて金属性のものに変えるように指示したという日くつきのものであった。

そして、接水実験のデータなどを加味して考察した結果、第三エンジンの少なくとも前方上側ボルトが接水前にすでに破断していなければ、推定コースより右に70mも離れたところまで飛ばない。前方上側ボルトの破断は異常燃焼時の衝撃によるものであるという驚くべき結論に達した。こうしたさまざまな事柄を総括することによって山名教授は事故の全貌を次のように推定した。

「JA8302号機は、低高度で減速のためフライトスポイラーを立てたところ、どうしたことかグランドスポイラーも立ってしまい、機首が下がって沈下しはじめた。機長は、すぐ機を引き起こそうとした。このため主翼のつけ根の付近が失速状態となり、グランドスポイラーが立っていることも重なって、主翼上面の気流が乱れすぐその後方にあるエンジンへの空気の流れが減少したりムラがでけたりして、第三エンジン

がストールを起こした。エンジン内部では、流入空気の不足から正常な混合気体ができなくなり、燃焼ストップ、流入燃料の自然再点火、爆発的な異常燃焼の発生、その衝撃によるエンジン全体の胴体外側へのねじれ、前方上側ボルトの破断、エンジンのがたつきによる後方ボルトの破断の進行、機体の激しい尻振り運動などが矢つぎばやに次々と発生し、事故機は完全に操縦の自由を失った。そしてついに事故機は、機首を9-10度もちあげて、右バンクと左横すべり、機首の横振りなど、着水実験で確認したような異常な姿勢で、接水するに至った。すでにボルトの一部が、切れてガタガタしていた第三エンジンは、接水と同時に、左横すべりの機体の衝動方向と反対の右側へ反動力で飛ばされた。事故機はパウンドを重ねて数百メートル進みバラバラになって水没した。

山名教授の考察は、さらに機内における「火」の問題にまで及んだ。

「第三エンジンがストールを起こして燃焼が止まった時、未燃ガスが空調装置を通じて操縦室と客室内に流れ込み、機長はスライドガラスを開けた。しかし、次の瞬間には、異常燃焼のショックですぐわきの最後部客室窓3個が破られ、その穴から異常燃焼の火が客室内の未燃ガスに引火し、客室内に一過性の炎が走った。乗客の中には軽い火傷を顔や頭、手に負う者が多数出て、騒然となった。第三エンジンは着水の直前か直後に、後方ボルトが切れて180度回転する運動をしさらに前方上側ボルトも切れて離脱したものと考えられる。

機長側のスライド窓の止め金が外れていたが、これは単なるショックでは開かず、人為的に開けたものと考えられる。さらに客室内張りの黒変、空調装置の残がいの状態、第三エンジンわきの窓の破損状態、火傷を負った乗客が第三エンジンからの空調装置のある客室右側に多いこと、などの事実を、以上の推定を裏づける」

以上のような山名レポートは、昭和44年10月6日午後、調査団の会議で延々7時間にわたって、フィルムやスライド、図面を使って報告された。

しかし、最終報告書は山名レポートを全くといってよい程無視し、「原因不明」の線でもとめてあった。山名教授が調査したことに対しては、接水実験をやったことだけに申しわけばかりに触れているだけで、その実験結果から導き出された結論や、その他エンジンの異常燃焼や取付けボルト、グランドスボイラーなどについては全く無視するか、スボイラーは立っていないなどという反論ばかりくどくど説明し、初めて読む者にとっては、不思議な報告書になっていた。

山名教授は「権威ある、最終報告書には自分の名前を載せないで欲しい」ということと委員の辞退を願い出した。理由は調査理念があまりにも違い過ぎるばかりで

はなく、調査委員会の進め方に話し合う姿勢が少しもないということだ。

これで「権威、ある」公文書、からは、山名教授らの調査結果の最も重要な部分は抹殺され、《JA8302号機》の残がいのも、いずれスクラップとしてくす屋に処分されるであろう。

この本を通じて、著者の5年間にわたる情熱というもの強く感じられた。

これは、調査を通して接した遺族に対する人間性から出たものであるだけに一層強かった。

以上が「マッハの恐怖」の内容である。

コンコルドの墜落によせて朝日新聞の「天声人語」氏が、おもしろいことを言っていた。

「かつてボーイングのある機種が墜落した時、英国の新聞は、『米国製ボーイング墜落』と書いたが、同じ機種が新記録を作った時は、『英国製ロールスロイス・エンジンが世界記録』と報じた。実は英国のエンジンを使って米国で製造した機種だった。人間も国も威信やメンツにとられると、時として、耳が遠くなったり目がかすんだりする」と。

昭和48年度図書委員 (教官および学生)

倫哲・独語	※芋川 平一	E	1	古沢 茂
数 学	森川 治	E	2	大内 博文
機械工学科	青木 勝	E	3	鈴木 岳彦
電気工学科	渡辺 喜郎	E	4	大沢 貞夫
工業化学科	引地 宏	E	5	野崎 英男
土木工学科	亀山 和男	C	1	鈴木ひとみ
事務部長	長谷川 潔	C	2	細井 朋子
庶務課長	佐藤 正二	C	3	森 敏之
学生課長	大地 正司	C	4	三宅 幸子
図書係長	加藤 勇	C	5	伊藤 浅夫
		土	1	山岸 章
M	1	土	2	鈴木 賢一
M	2	土	3	入江 直光
M	3	土	4	西原 衡作
M	4	土	5	佐藤 憲二
M	5			(※印は主任)



昭和47年度分類別学生利用状況

000 総記	19	350 統計	4	計	9
10 図書館	1	60 社会学・社会問題	16		
20 図書・書誌学	2	70 教育	12	700 芸術・美術	27
30 百科事典	9	80 風俗・習慣・民俗学	12	10 彫刻	2
40 -- 一般論文集・講演集	20	90 国防・軍事	1	20 絵画	16
50 逐次刊行物	8	計	292	30 版画	13
60 学会・団体研究調査機関	1			40 写真	6
70 新聞・ジャーナリズム	11	400 自然科学	75	50 工芸	1
80 双書・全集	155	10 数学	757	60 音楽	43
90 その他	0	20 物理	366	70 演劇	3
計	222	30 化学	1,678	80 体育・スポーツ	114
		40 天文	77	90 演芸・娯楽	4
100 哲学	168	50 地学・地質	12	計	231
10 各論	31	60 生物・博物	18		
20 東洋	149	70 植物	5	800 語学総記	9
30 西洋	164	80 動物	8	10 日本語	20
40 心理	56	90 医学	29	20 中国語	20
50 倫理	53	計	3,357	30 英語	182
60 宗教	23			40 ドイツ語	41
70 神道	10	500 工学・技術	462	50 フランス語	7
80 仏教	166	10 土木	388	60 スペイン語	0
90 キリスト教	95	20 建築	27	70 イタリア語	2
計	1,312	30 機械工学	705	80 ロシア語	0
		40 電気工学	1,339	90 その他	1
200 歴史総記	66	50 海事工学	7	計	282
10 日本	136	60 探鉱冶金	81		
20 アジア	12	70 化学工業	74	900 文学総記	274
30 ヨーロッパ	17	80 製造工業	8	10 日本文学	1,072
40 アフリカ	12	90 家事	0	20 中国文学	48
50 北米	0	計	2,860	30 英米文学	36
60 南米	1			40 ドイツ文学	21
70 オセアニア	5	600 産業総記	1	50 フランス文学	10
80 伝記	65	10 農業	0	60 スペイン文学	0
90 地理	94	20 園芸	0	70 イタリア文学	1
計	396	30 畜産	0	80 ロシア文学	50
		40 畜産	1	90 その他	9
300 社会科学総記	77	50 林業	0	計	1,521
10 政治	41	60 水産	2		
20 法律	20	70 商業	0	合計	10,482
30 経済	104	80 交通	3		
40 財政	2	90 通信	2		

昭和45～47年度（3カ年）学生利用状況

N・D・C分類	実 数			%		
	45	46	47	45	46	47
000 総 記	765	209	222	3.7	2.2	2.1
100 哲 学	1,157	776	1,312	5.6	7.4	12.6
200 歴史・地理	764	290	396	3.7	3.0	3.8
300 社会科学	475	185	292	2.3	1.9	2.8
400 自然科学	6,756	2,718	3,357	32.7	28.4	32.0
500 工学・技術	6,363	3,200	2,860	30.8	35.8	27.0
600 産 業	21	9	9	0.1	0.1	0.0
700 芸術・体育	393	221	231	1.9	2.2	2.2
800 語 学	764	297	282	3.7	3.0	2.7
900 文 学	3,306	1,625	1,521	16.0	16.0	14.5
合 計	20,764	9,531	10,482	100	100	100

昭和47年度利用人員（科・学年別）

科	学 年					計	%
	1	2	3	4	5		
機械工学科	230	212	617	584	448	2,091	23.6
電気工学科	206	786	384	391	619	2,386	27.0
工業化学科	194	294	775	1,161	519	2,943	33.3
土木工学科	82	321	318	449	252	1,422	16.1
計	712	1,613	2,094	2,585	1,838	8,842	100
%	8.1	18.3	23.7	29.2	20.8	100	

新着図書目録

図書館にのみ所在する図書
を分類別受入順に記載

総記

末川博 現代青年にあう 雄渾社
朝日年鑑 昭和48年版 朝日新聞社
日本写真年鑑 昭和48年版 日本写真新聞社
朝日新聞副刊版 47-12 朝日新聞社
同 48-1 同
同 48-2 同

土岐邦夫 世界の名著32 カント 中央公論社
同 43 マルクス・エンゲルス 中央公論社
日本の名著28 福山陽 同

野村実 シュヴァイツァー著作集第三・四巻 白水社

哲学

田辺元 田辺元全集 8・9 筑摩書房

歴史

東京歴史科学研究会 歴史を学ぶ人々のために 日本放送出版協会
船来富三 歴史をみる眼 (NHKブックス15) 同
同 歴史と人間 (同 32) 同

山脇重雄等 世界史の理解 評論社

池田弥三郎 日本故事物語 河出書房新社

坂島礼二 論著日本歴史I 大和王権 有精堂

坂根典久 論著日本歴史10 自由民権 有精堂

矢守一彦 城下町 (日本の歴史地理1) 学生社

藤岡謙二郎 大和川 (同 2) 同

阿部知二等 西洋故事物語 河出書房新社

後藤基己等 中国故事物語 同

奈良本辰也 京都故事物語 同

高橋義孝 東京故事物語 同

寺尾善雄 中国名物物語 同

市川健夫 信州の峠 第一法規

安藤慶一郎 国境いの村 学生社

日本地誌研究所 地理学事典 二宮書店

末尾至行等 行動の科学としての地理学 大明堂
図解地理実習 同

中村吉治 日本社会史 山川出版社

NHK 仙台制作グループ 近代東北庶民の記録上・下 日本放送出版協会

松田寿男 アジアの歴史 (NHK市民大学叢書21) 日本放送出版協会

シベリア研究会 新しいシベリア—その自然・社会・生活 古今書院

浅井得一 人間の地理学 至川大学出版

正井泰夫 東京の生活地図 時事通信社

中山昭吉・中山洋子 東欧歴の露国ポーランド 古今書院

高木秀樹 ブラサとアミーゴのメキシコ 同

梶正一 ニュージールランド 同

吉崎正松 都道府県名と国名の起源 同

会津若松出版会 会津の歴史 講談社

綾山猛 歴史と風土 筑紫 社会思想社

桜井正信 歴史と風土 武蔵野 社会思想社

菊浦重雄 西洋史要説 評論社

正井泰夫 都市の環境—日本の都市像— 三省堂

相沢忠洋 「岩宿」の発見 講談社

社会科学

戸原四郎 経済学全集7 恐慌論 筑摩書房

瀬川春雄 法律を学ぶ人のために 世界思想社

高坂正寿 政治を学ぶ人のために 同

東京都市社会学研究会 都市社会学に関する文献総合目録 学術書出版会

羽仁五郎 都市の論理 勁草書房

梶野節美 新しい都市理論 鹿島出版会

新城常三 庶民と旅の歴史 (NHKブックス143) 日本放送出版協会

青木英夫・大塚力 衣と食の歴史 雄山閣

青木英夫・大塚信一郎 紳士服の歴史 同

蒲原悦治 原色日本鳥類図鑑 保育社

日本甲虫学会 原色日本昆虫図鑑上・下 同

からだの読本1・2 暮らしの手帳社

足立映生 情報科学入門 オーム社

三根久 情報理論入門 朝倉書店

大野重 情報科学講座D15・3 共立出版

オンライン・システム 小松秀作 数学要項公式集 広川書店

宇田川鉄久等 数値計算法 コロナ社

小谷正雄 分子科学講座1 分子科学と量子力学 共立出版

森野米三 同 4 分子の構造 同

W-J-Duncan他 Mechanics of Fluids Edward Arnold

舟渡清 最新ガスクロマトグラフィ— 広川書店

(1) 基礎編 (2) 応用編

小泉正夫 化学給合論 改訂版 共立出版

磯田和男 FORTRANによる数値計算ハンドブック オーム社

神山雅英 エレクトロニクスのための量子物理 丸善

水高健夫 固体物理学 第2版 岩波書店

桜井明 電磁流体力学・プラズマ入門 東京電機大学出版局

武田達 プラズマの基礎 朝倉書店

奥田孝英 気体プラズマ現象 コロナ社

伊藤博 プラズマ物理学入門 共立全書536 共立出版

後藤憲一 プラズマ物理学 同

沢本忠一 プラズマ物理 コロナ社

山本真三 改訂 電離気体 同

嶋海元 デルクロア・プラズマ物理学I 共立出版

大橋孝敏 MITコアカリキュラム 産業図書

電気力学I・II・III ブルーバックス

198 数値科学の世界 講談社

203 相対性理論はむずかしくない 同

204 生命合成への道 同

205 現代の物理学 同

206 バイオリズムとはなにか 同

西田俊夫 持ち行列の理論と応用 朝倉書店

中村貞男 大学課程 図数図学 オーム社

自然科学

基礎物理学道書

1 質点の力学 筑摩書房

2 量子論 同

3	質点系・剛体の力学	同		学術文献普及会	コンクリート工及び鉄筋		
4	音と音波	同	E・R・G・Eckert		コンクリートの実用計算	現代社	
5 A	量子力学Ⅰ	同		Analysis of Heat and Mass Transfer	岡尚平	橋梁の各種事故例と対策	理工図書
5 B	同 Ⅱ	同		McGraw-Hill	高島春生		
6	粒子性・波動性	同	S・P・Timoshenko		道路橋の横分配変用計算法	駒編	
7	弾力学	同	Theory of Elasticity	Kogakusha	同	同	後編 現代社
8	運動・波粒	同	古谷義一		半井敦	鋼橋要旨書	技報堂
9	物性論	同		ワークデザイン システム設計の新手法	橋本雅	鋼橋の理論と計算	山海堂
10	統計力学	同		日刊工業	阿部英彦		
11	地球の物理	同	産婦健児			鋼鉄道橋の設計と解説	現代社
12 A	電磁気学Ⅰ	同	生産設計の実察	同	横道英雄		
湯川秀樹	量子力学序説	弘文堂	鈴木武	近代品質管理総論	同	コンクリート橋 鉄筋コンクリート橋および	
朝永振一郎	量子力学の世界像	同	吉屋善正	流体力学	朝倉書店	プレスコンクリート橋	技報堂
小出昭一郎	量子力学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	東京図書	水波工学	実教出版	田中五郎	トラス橋の設計	オーム社
角谷典彦	連続体力学	共立出版	日本非破壊検査協会	非破壊検査便覧	日刊工業	橋田敏之・斎藤昇	P C 橋のプレストレッシングと設計施工
仙波正花	論集 第2・3巻	日刊工業	村上秀次郎	工学における数学的方法上・下	土木院編集委員会		
山内三郎	数理科学シリーズ	培風館	石谷清幹	工学概論	法政大学出版	土木工事施工例集2 橋りょう編	山海堂
1	電子計算機のための数値計算法Ⅰ	同	東京電機大学	立体図の描き方 基礎編	東京電機大学	川田忠樹	吊橋の設計と施工
3	同 Ⅱ	同	福田秀雄	設計のための材料力学	広川書店	住友建設株式会社	P C 長大橋技術研究会
井本悦	共立全書	共立出版	行田明司・小宮山満	Part / Cpm入門	オーム社	日本都市計画学会	P C 長大橋の設計と施工
55	有機電子論Ⅰ 増補版	共立出版	小松定夫	薄肉構造物の理論と計算Ⅰ	山海堂	都市計画用語集	技報堂
77	同 Ⅱ	同	田口文雄	ラーメン実用解法	国民科学社	佐々成秀彦・長等晴夫	新都市の計画
井上勝也 (C A シリーズ)	1 シリカと私	東京化学同人	大地羊三	電子計算機による構造解析	橋梁編纂会	春日成之	都市計画
山根登	2 水はみんなのもの	同	川田忠樹	長径間吊橋の理論と計算	同	町田作 同	地人書館
佐々木恒孝	エマルジョンの科学	朝倉書店	土原七司	コンピュータによる橋梁と構造の振動解析	森北出版	平川保一	都市計画概論
中崎昌雄	有機化学実験法	同	大橋昭光	長径間つり橋の架設	山海堂	松井達夫	都市計画入門
佐々木正	人名別・反応別・試薬別	同	長谷川清	水力学(最新機械工学シリーズ6)	森北出版	鈴木信太郎	新しい都市計画の方向
	新有機合成反応	海江堂	橋浦大三	橋梁工学	コロナ社	同	同 2 放射線防護
	ヘドロ環の化学Ⅰ〜Ⅲ巻	同	福田武雄	大学課程 橋梁工学	オーム社	同	同 4 燃・材料
橋本直樹	有機合成の進め方	広川書店	同	同 同 橋梁設計例	同	同	同 5 熱工学・構造設計
	有機反応機構研究法	同	近畿高校土木会	同	同	同	同 6 計装制御
野副鉄男	有機化学下	同	考え方解き方 橋梁	同	同	同	同
舟坂潤・滝川信夫	最新ガスクロマトグラフィーⅢ	広川書店	海辺昇	格子げたの理論と計算	技報堂	若柳香里	高気タービン
日本分析化学会	分析化学便覧	丸善	島田静雄・倉西茂	曲り梁の計算式	同	尾崎紀男	自動車工学
Fred W・Billeyer	Testbook of Polymer Science	トッパン	渡辺昇	曲線げたの理論と計算	同	大野泰雄	実用自動車工学 エンジン編
大石純化学	天然高分子化合物Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	朝倉書店	森重龍馬	橋台・橋脚の設計2	オーム社	同	同
	合成高分子化合物Ⅱ	同	下部構造研究会	わかりやすい橋台・橋脚の設計計算例及解説	現代社	高塚清	交通機械工学
荒巻子	生きている清一海岸の科学一	三省堂	鈴木俊男	橋りょう工事ポケットブック	山海堂	平尾政	自動車用機関計画法論
Dictionary of Organic Compounds	Fifth and Cumulative Supplement	Eyre & Spottiswoode	橋本直樹	橋りょう工事ポケットブック	山海堂	吉原英夫	ホイラーと蒸気原動機
	Sixth Supplement	同	坂井盛男			長尾不二夫	
	Seventh Supplement	同					

工 学

内燃機関講義	同	粒体工学ハンドブック	朝倉書店	軟式テニス教室	同
田村重典		中杉浩 プロセス設計プログラミング入門	日刊工業	木村政彦	
機械力学	森北出版	姉友彦 工業化学計算法—入門から現場まで—	日刊工業	素道教室	同
横山重吉			同	滝口峰造	
流体機械	コロナ社	日本学術振興会染色加工系第20委員会	同	芸術の意味	みすず書房
長谷川一郎		新染色加工講座1 染料・顔料 共立出版			
穴あけ加工便覧	産業図書	同 4 染色・堅ろう性の理論			
工作アニマル編集委員会		同 6 浸染1			
工作アニマル3 フライス加工編	ジャパンマシニスト	高分子工学講座			

語 学

大橋秀雄		1 高分子の化学	地人書館	朝日新聞社	
流体機械	森北出版	2 高分子の物理学		朝日現代用語事典1973	朝日新聞社
久津見舜一		4 化学繊維の訪糸とフィルム成形 I)・II)		松坂忠則	
空気圧機器と応用回路	日刊工業	5 プラスチック成形材料		新しい文書実務	春秋社
中島弘行		6 プラスチック成形加工		時技誠記	
空気圧応用機械と回路設計	同	7 ゴムの性質と加工		現代の国語学	有精堂出版
藤野喜一		8 熱硬化性樹脂とその加工		土井忠生	
計算機システム基礎論	共立出版	9 接着と積層		日本語の歴史	至文堂
大村久人		11 プラスチック成形機械と成形技術 I)・II)		日本大辞典刊行会	
図解フォートラン入門	日刊工業	12 化学繊維の染色と加工		日本国語大辞典2	小学館
高橋秀俊		13 高分子材料の工学的性質 I)・II)			
エネルギー変換論	ラティス	14 高分子材料試験法			
日本オーディオ協会		15 放射線高分子化学			
アマチュアオーディオハンドブック	オーム社	16 高分子製造の化学工学			
石丸勝敏		17 高分子工業プラント			
システムズ・エンジニアハンドブック	同	18 高分子材料の応用と開発			
		別巻 ラテックスペースト 粉末樹脂加工			

文 学

森口繁一		片方再治		丸人日記	角川書店
電子計算機の学習	同	プログラムドスタディーシリーズ		櫻井基次郎	
上滝致孝		2 直流回路	電気書院	櫻井基次郎全集第一〜三巻	筑摩書房
入門FORTRAN	同	3 交流回路	同	小田実 何でも見てやろう	河出書房新社
一松信 計算機序論	共立出版	14 照明・電熱	同	グレアム・グリーン選集	
井上謙蔵		住谷啓 電気理論の基礎と演習2)		1 内なる私	早川書店
電子計算機基礎講座7		一交流理論編一	コロナ社	2 スタンブール特急	同
システムプログラム	同	電気学会通信教育会		3 ここは戦場だ	同
大槻繁雄		電気鉄道ハンドブック	電気学会	4 英国が私をつくった	同
コンピュータの関連知識	産報	保護継電器ハンドブック	オーム社	5 単独売ります	同
秋山操 ミニコン・プログラムの演習	同	三上一郎		6 ブライトン・ロック	同
佐々木正		保護継電器の試験と保守	同	7 密使	同
電卓技術教科書・基礎編	ラジオ技術社	日本電気技術者協会		8 恐怖省	同
阿部邦雄		自家用電気主任技術者ハンドブック	同	9 第三の男・落ちた偶像	同
塑性加工	朝倉書店	配電盤技術便覧	同	11 二十一の短編	同

芸 術

加藤健三		今井俊賢		カミュ全集	
全金属性加工学	丸井	入門書道全集1 楷書	実業之日本社	1 アストウイリアスの反乱	新潮社
日本金属学会		同 2 行書	同	2 買邦人・シーユボスの神話	同
金属便覧	丸井	江波戸昭		3 カリキュラ・網解	同
荒木透 鋳鋼・鋳鉄	朝倉書店	世界の民謡をたずねて	自由国民社	4 ベスト	同
日本熱処理技術協会		小沢丘 剣道教室	鶴書房	5 成瀬令・正義の人びと	同
鋳物と非鉄金属材料の熱処理	日刊工業	窪田登 ボディビル入門	同	6 反抗的人間	同
三羽忠広		同 サーキット、トレーニング入門	同	7 十字架への献身・積善たち	同
基礎・応用合成樹脂の化学	技報堂	学生の音楽事典	音楽之友社	クロニン選集	
合成樹脂工業技術研究会		竹内勉 うたのふるさと	同	城巻	三笠書房
合成樹脂便覧	産業図書	三橋一夫		地の果てまで	同
浅井治海		フォークソングの世界	同	孤独と純潔の歌	同
合成ゴム便覧	朝倉書店	浅見・窪田		権子屋の城 上・下	同
村橋俊介		スポーツマンの体力づくり教本		三つの愛 上・下	同
プラスチックハンドブック	同	ベースボールマガジン		青春の生きかた	同
大津隆行		岡野俊一郎		人生の途上にて	同
高分子工業化学	同	サッカー教室	鶴書房	天国の鐘	同
望月聡 化学プロセス制御	東京化学同人	鶴堂御堂公福			
買田尚夫					
化学工業・今日と明日	同				
井伊谷剛一					

高島正明		3 民話詩・劇詩	同	54 片山伸・平林初之輔	同
太場の讃歌 カミュの手帖Ⅰ	新潮社	4 小説	同	91 現代名作集Ⅰ	同
同 反抗の論理	同 2 同	藤村全集 第1巻	筑摩書房	92 同 2	同
有吉佐和子		吉田晴一・芥川比呂志		日本近代文学大系	
悦徳の人	同	芥川龍之介 写真作家伝巻7	明治書院	16 正岡子規集	角川書店
大野林火		折口信夫全集 8~11	中央公論社	32 倉田百三・武者小路実篤集	同
近代俳句の鑑賞と批評	明治書院	現代の文字		60 近代文学回覧集	同
森本修 新考・芥川龍之介伝	北沢図書出版	3 楠谷雄高・椎名麟三	講談社	明治文学全集	
島島勇 私伝夏目漱石	いづみ出版	16 小島信夫	同	7 明治翻訳文学集	筑摩書房
伊藤一夫		34 藤田翔・丸谷才一・柏原兵三	同	60 明治詩人集一	同
島崎藤村事典	明治書院	35 古山高麗雄・清岡肇行	同	筑摩世界文学大系	
野田字太郎		現代日本文学大系		13 モンテーニュⅠ	同
石川啄木の世界	平凡社	32 秋田雨峯	筑摩書房	21 リチャードソン・スターン	同
ブーシケン全集		40 安倍能成・岡部次郎	同	22 ルソー	同
1 抒情詩・物語詩Ⅰ	河出書房新社	41 千葉元麿	同	52 ゴーリキー	同
2 オネーギン・物語詩Ⅱ	同	49 葛西善蔵・黒村謙多	同	64 ムージル・プロッホ	同

お知らせ

1. 学生諸君に好評の閲覧室備付の電子リコピーを、新品に取替えましたので、更に使い易くなったことと思います。
2. 閲覧票を廃止して、学生証をもって代用することにしました。
3. 閲覧票は帯出票として使うことにしましたので、従来の帯出票2枚が事実上3枚に増えたこととなります。
(1度に3冊まで借りることができるようになったのです。)
4. 返却日を忘れ易い諸君のために、貸出期限票を用意してありますから、借りた本にはさんでおく和良好的でしょう。

編集後記

新学期にあたり、学生諸君の図書館利用の現状について考えてみたい。第一に、45~47年度(3カ年)の利用状況をみると、47年度は少々上向いたとはいえ、45年度に比較すると大幅な低下である。新図書館は、旧図書室より格段と立派になり設備も整った筈であるのに、この利用状況では何とも情ない次第である。いまの若者は本を読まなくなったと言われて久しいが、本校においても世評の通りであろうか。第二に、各学年および各学科において大分格差がみられることである。街の盛り場を徘徊している学生達の所属学年・所属学科と、この統計数字との間には——とくに上級生の場合——何らかの関連がありそうに思えるのであるが、如何であろうか。

マス・コミの発達した現代において、知識を獲得し、教養を身につける手段は、読書に限られないことは確かである。とはいえ、手に入れた情報を整理し分析し、次の行動(飛躍・発展)に役立たせる力は、人間の思考力にまたなければならない。世をあげてソフト・タッチで「ヤワ」な人間が量産されている時に、せめて、わが福島高専生は、たくましい肉体にねばり強い精神と透徹した理論・思考力をわがものとして卒業して行って欲しいと思う。

そのためには、まず手始めに書庫に入り、諸君の手に取られ頁を繰られることを待っている三万冊近くの本の横顔を眺めてみることだ。その容姿が何も訴えかけてこなければ、君の感受性はゼロである。その顔形が何か君の心を捕え釘付けにでもすれば、シメタモノである。君の心の窓は開かれ、未知の世界に大きく羽撃くことができるであろう。異性を口説きたければ、まずもの言わぬ本から試してみよ。本で駄目なら、君は異性を口説くのを止した方がよい。火傷をするだけだからである。所詮、本も読まぬ人間の許には、ロクな異性は近寄って来ないのだから……。

(芋川)